

教
自
佛
蘭
西
法
律
書
訴
訟
法
二

館書回京東
新 門 一 四
部 一 一 二
號六九九四

CF2
3
07
共
八
本

明治六年九月刊行

權大内史箕作麟祥譯

佛蘭西
法律書
訴訟法

文部省

佛蘭西法律書
訴訟法第二

權大内史箕作麟祥 譯

○第九章 訴訟ノ故障ヲ述フル事

第一卷 外國人ノ立ツ可キ保證ノ事

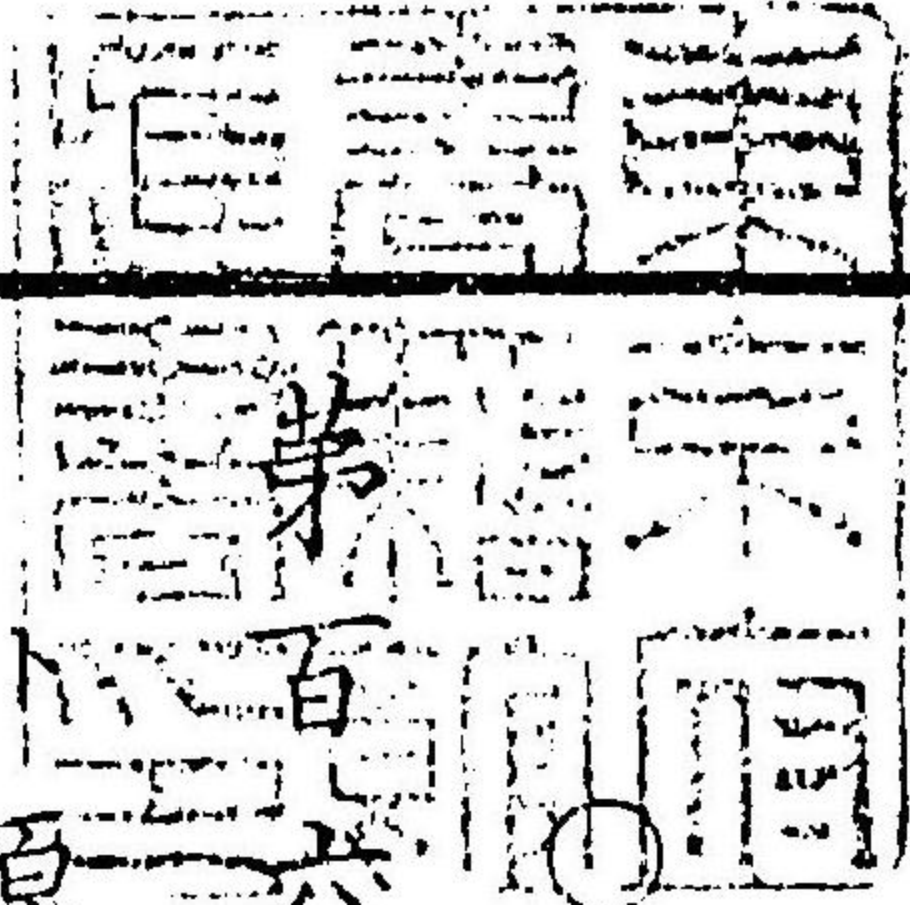
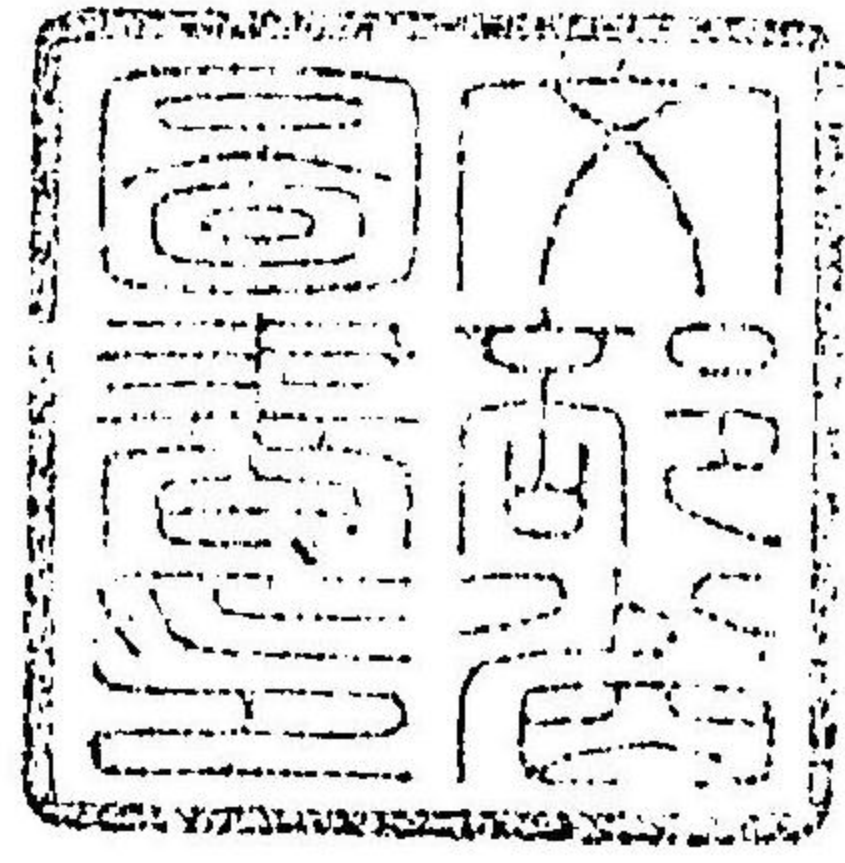
第一百六十六條 總テ外國人ハ主タル原告タル

原告ノ訴訟ヲ助クル者タルトヲ問ハス被

告人ヨリノ要ヲ受クルニ於テハ總テ訴訟ノ

故障ヲ述フル前ニ裁判所ノ費用及ヒ被告ノ

CF2
3
07



明治六年九月刊行

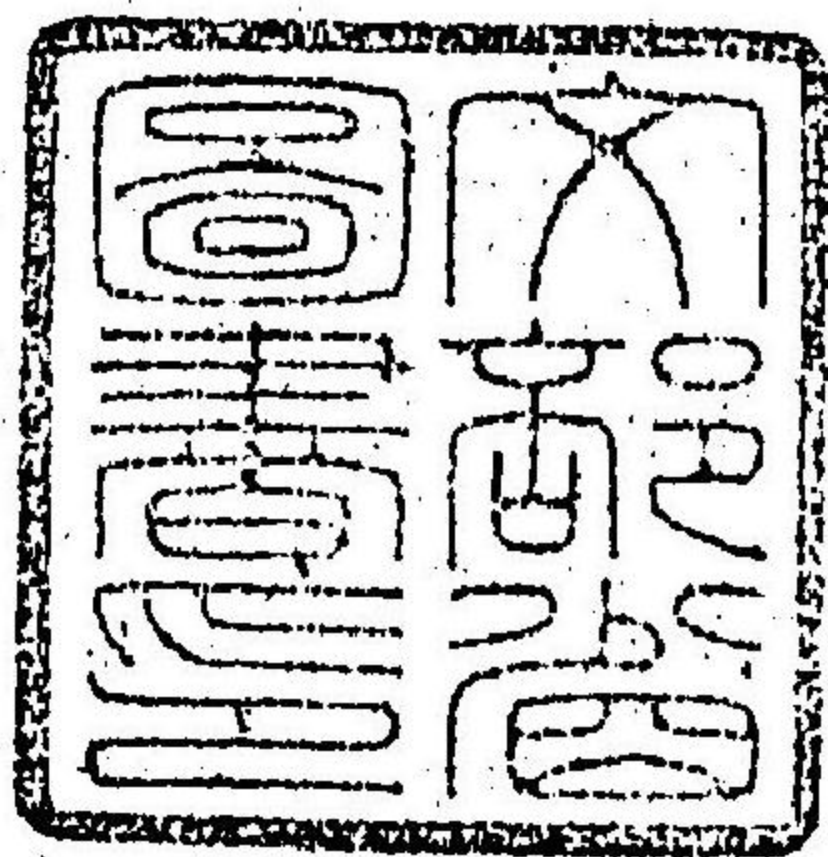
權大内史箕作麟祥譯

仙蘭西
法律書
訴訟法

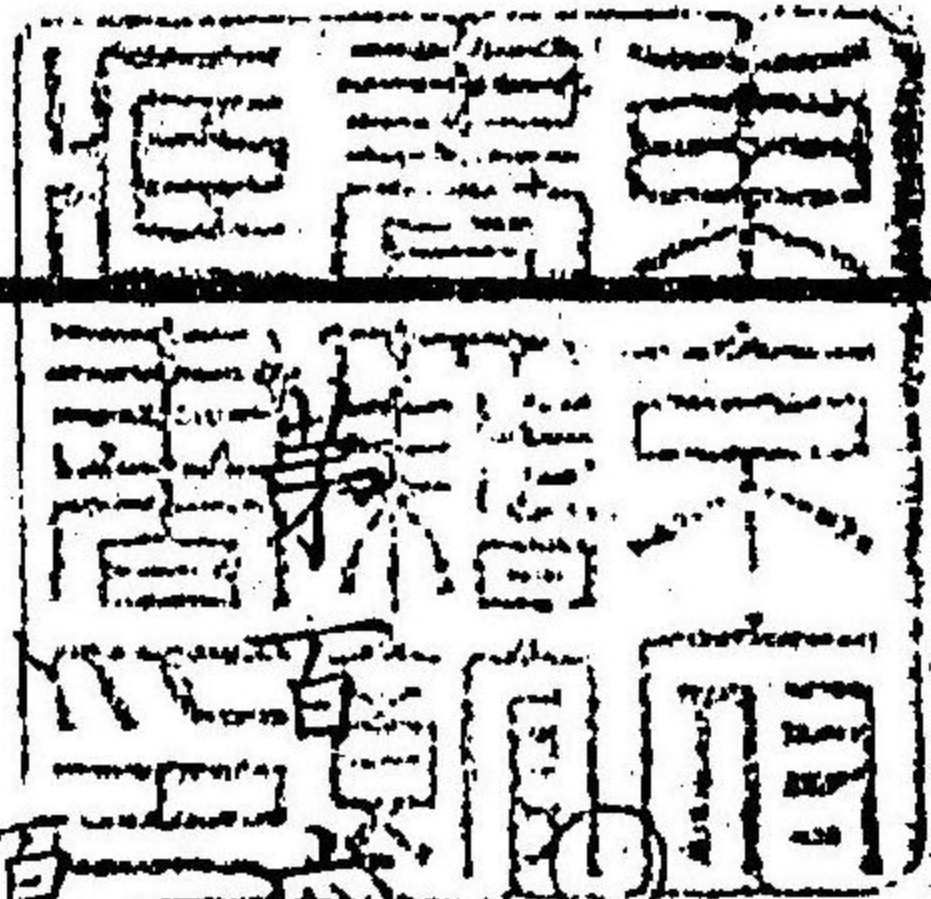
文部省

佛蘭西
法律書
訴訟法第二

權大内史箕作麟祥 譯



CF2
3
07



○第九章 訴訟ノ故障ヲ述フル事

第一卷 外國人ノ立ツ可キ保證ノ事

十六條 總テ外國人ハ主タル原告タル

原告ノ訴訟ヲ助クル者タルトフ問ハス被

告人ヨリノ要ヲ受クルニ於テハ總テ訴訟ノ

故障ヲ述フル前ニ裁判所ノ費用及ビ被告人

佛蘭西法律書

上篇第二章第九章第一卷第一

大内史

ニ損失ノ償ヲ拂フ可キノ言渡ヲ受クル時之ヲ拂フ可キノ保證人ヲ立ツ可シ

第百六十七條 保證人ヲ立ツ可キノ言渡書ニ幾許ノ金高ニ至ル迄其保證人ヲ立ツ可キヤヲ定ム可シ但シ外國人其金高ヲ官署ニ預ケ又ハ佛蘭西國內ニ於テ所有スル其不動産ヲ以テ保證ニ充ツルニ十分ナルヲ證スル時ハ別ニ保證人ヲ立ツルニ及ハス

○第二卷 裁判所ノ管轄異ナルヲ以テ其裁判所ノ吟味ヲ受クルニ故障ヲ述ル

事

第百六十八條 被告人訴訟ヲ管轄ス可キノ非サル裁判所ニ呼出ヲ受ケタル時ハ管轄ノ裁判所ニ出ントスルノ訴ヲ為スヲ得可シ

第百六十九條 其被告人ハ訴訟ヲ受クルニ付テノ其他ノ故障ヲ述ヘ及ヒ答辯ヲ為ス前ニ前條ノ訴ヲ為ス可シ

第百七十條 然ル訴訟ノ事柄ニ付キ被告人其呼出ヲ受ケレ裁判所ノ管轄ヲ受ク可ラサルニ於テハ訴訟ヲ為シ始メタル後何レノ時ト

雖氏管轄ノ裁判所ニ出ント訴フルヲ得可
レ若レ本人之ヲ求メサル時ハ裁判所ノ職務
ヲ以テ管轄ノ裁判所ニ出ツ可キヲ言渡ス
可レ

第百七十一條 甲ノ裁判所ニ訴出シタル事柄
ニ付キ既ニ乙ノ裁判所ニテ訴訟アル時又ハ
甲ノ裁判所ニ訴出シタル事柄乙ノ裁判所ニ
テ現ニ為ス訴訟ノ事柄ニ附帶シタル時ハ乙
ノ裁判所ニ出テ訴訟ヲ受ク可キノ訴ヲ為ス
ヲ得可レ

第百七十二條 裁判所ノ管轄ノ異ナルヲ以テ
其裁判所ノ吟味ノ故障ヲ述フル訴ハ至急吟
味ノ法式ヲ以テ之ヲ裁判ス可ク之ヲ後日ニ
延レ又ハ主タル訴訟ト共ニ裁判スルヲ得
ス

○第三卷 呼出狀及ヒ其他訴訟手續ノ書
類ヲ取消ス可キ訴

第百七十三條 總テ呼出狀又ハ裁判手續ノ書
類ヲ取消サントスル訴ハ裁判所ノ管轄異ナ
ルニ付キ其裁判所ノ吟味ヲ受クルニ故障ヲ

述フルヲ除クノ外總テ論辨ヲ為シ又ハ訴訟ニ付テノ故障ヲ述フル前ニ之ヲ為ス可シ但シ其後ニ至テハ之ヲ為スヲ得ス

○第四卷 訴訟ノ猶豫ヲ求ムル事

第百七十四條 遺物相續人、寡婦、離婚セラレシ婦、夫ト財産ヲ分チタル婦ハ遺物相續ノ始リシ日又ハ財産ノ共通ヲ解キタル日ヨリ財産ノ目錄ヲ記スル為メ三月ノ猶豫ト熟考ヲ為スタメ四十日ノ猶豫トヲ得テ其時間訴訟ノ猶豫ヲ求ムルヲ得可シ若シ又三月前ニ目

録ヲ記シ終リタル時ハ其日ヨリ四十日ノ猶豫ノ期限ヲ算ス可シ

若シ三月内ニ目錄ヲ記スルヲ能ハサルノ證アル時ハ更ニ相當ノ猶豫ノ期限ヲ加ヘ且熟考ヲ為ス為メ四十日ノ猶豫ヲ許ス可シ但シ此事ハ至急吟味ノ法式ヲ以テ之ヲ裁判ス可シ

遺物相續人ハ前ニ記シタル猶豫ノ期限ノ終リシ後ト雖モ通常ノ遺物相續人タル處置ヲ為サ、ル時又ハ控訴ス可カラサル裁判言渡

ニ因リ通常ノ遺物相續人ナリト定メラレシ
トナキ時ハ尚目録ヲ記シテ且遺物ノ高ニ至
ル迄ノ外負債ヲ償ハサルト權アル遺物相續
人トナルノ權アリ

第百七十五條 保證人ヲ裁判所ニ呼出ス可キ
ノ權アリト述フル者ハ主タル訴訟ノ日ヨリ
八日內ニ其呼出狀ヲ送達ス可シ但シ保證人
ノ住所ニ至ル迄ノ路程三「ミリヤメートル」毎
ニ一日ヲ増ス可シ○若シ一箇ノ事ニ付保證
人數人アル時ハ其保證人ノ中最遠ノ地ニ住

スル者ニ其呼出狀ヲ送達ス可キ期日內ニ其
他ノ保證人ニモ亦呼出狀ヲ送達ス可シ

第百七十六條 保證人已レノ保證人ヲ呼出ス
可キノ權アリト述フル時ハ其保證ノ訴ヲ受
ケタル日ヨリ算ヘ前ニ記シタル期限內ニ其
呼出狀ヲ送達ス可シ但シ保證人ノ保證人ヲ更
ニ保證スル人ヲ呼出スノ期限モ亦之ニ准ス
第百七十七條 被告人目録ヲ記シ且熟考ヲナ
ス為メノ猶豫ノ期限內ニ呼出ヲ受ケタル時
ハ其期限ノ終リシ日ヨリ保證人ニ呼出狀ヲ

送達ス可キ期日ヲ算フ可シ

第百七十八條 如何ナル事柄ニ付テモ被告人ノ幼年ナルヲ又ハ其他ノ特權アル原由ヲ以テ口實ト為シ其保證人ニ呼出狀ヲ送達スルニ付キ前ニ記シタル以外ノ猶豫ノ期限ヲ得可カラス但シ主タル訴訟ノ裁判ハ其保證人其定期ノ終リシ後尚出席セスト雖凡之ヲ遲延ス可カラス唯其被告人ハ後ニ保證人ニ對シ訴ヲ為スノ權アリ

第百七十九條 若シ被告人ノ其保證人ヲ呼出

ス可キ期日被告人ノ出席ス可キ期日ト同時ナラサル時被告人其出席ス可キ期日ニ至ラサル前ニ其保證人ニ呼出狀ヲ送リタル旨ヲ已レノ代書師ヨリ原告人ノ代書師ニ書面ヲ以テ報告セシメタルニ於テハ被告人抗傳者タルノ言渡ヲ受クルヲナカル可シ然レモ被告人保證人ニ呼出狀ヲ送達ス可キ期限ニ至リシ後保證人ニ呼出狀ヲ送リタルノ證ヲ立テサル時ハ直チニ主タル訴訟ヲ裁判シ且被告人保證人ニ呼出狀ヲ送リタルト

述フル所偽リナルノ證アルニ於テハ被告人
原告人ニ損失ノ償ヲ拂フ可キノ言渡ヲ受ク
可シ

第百八十條 原告人被告人ノ保證人ヲ呼出ス
ニ付キ猶豫ノ期限ヲ許ス可カラサル旨ヲ述
フル時ハ其述フル所ヲ至急吟味ノ法式ヲ以
テ裁判ス可シ

第百八十一條 保證人ナリトシテ呼出ヲ受ケ
タル者ハ保證者ニ非サル旨ヲ述フル為メト
雖モ主タル訴訟ヲ審判スル裁判所ニ出ツ可

シ然ル其保證人ヲ其至當ノ裁判所ヨリ更ニ
他ノ裁判所ニ出テシムル為メ故ラニ主タル
訴訟ヲ為シタル事ヲ證書又ハ其他ノ證ニ因
リ明ニ知リ得可キ時ハ保證人其至當ノ裁判
所ニ出ルコトヲ得可シ

第百八十二條 物權又ハ書入質ノ權ノ為メ端
式ノ保證ニ付テハ保證人被告人ニ代テ其訴
訟ヲ為スコトヲ得可シ但シ裁判所ヨリ訴訟ニ
付キ初度ノ言渡ヲ為ス前ニ被告人其訴訟ヲ
免ルコトヲ願フ時ハ之ヲ免ルコトヲ得可シ

然其被告人訴訟ヲ免レタル時己レノ權利ヲ保全スル為メ其訴訟ニ參スルコトヲ得可ク又原告人己ノ權利ヲ保全スル為メ被告人ヲ其訴訟ニ參シ置カシム可キノ要メヲ為スコトヲ得可シ

第百八十三條 通常ノ保證ニ付テハ保證人本人ニ代テ訴訟ヲ為スコカラス唯其訴訟ニ參スルコトヲ得可シ

第百八十四條 主タル訴訟ト保證ノ訴訟トヲ同時ニ裁判スルヲ得可キ時ハ共ニ之ヲ裁判

ス可ク然ラサル時ハ主タル原告人其二箇ノ訴訟ヲ各自ニ裁判ス可キ要メヲ為スコトヲ為シ得可シ此場合ニ於テハ主タル訴訟ノ裁判言渡書ニ保證ニ付テノ訴訟ヲ別ニ為スコキコトヲ記ス可シ但シ主タル訴訟ノ裁判言渡ノ後保證ニ付テノ訴訟ヲ裁判ス可キ時ハ別ニ之ヲ裁判ス可シ

第百八十五條 端式ノ保證ニ付キ保證人ヘノ裁判言渡ハ原告人其本人ニ對シテ之ヲ執行ス可シ

此場合ニ於テハ本人訴訟ヲ免レタルト訴訟ニ參シタルトヲ問ハス原告人ヨリ其本人ニ裁判言渡書ヲ送達スルヲ以テ其裁判言渡ヲ執行ノニ足レリトス但レ其他別ニ訴訟ノ手續ヲ為スニ及ハス○然レ被告人ヨリ裁判ノ費用及ヒ原告人ヘノ損失償ヲ拂フ可キ言渡ハ原告人保證ニ對シテ之ヲ執行ノ可シ然レ保證ノ金高ヲ拂フヲ能ハサル時ハ本人其裁判費用ヲ償フ可シ但レ本人訴訟ヲ免レタル時ハ格別ナリトス

又裁判所ヨリ別段ノ言渡アル時ハ本人ヨリ原告人ニ損失ノ償モ亦之ヲ拂フ可シ
 第百八十六條 訴訟ノ猶豫ヲ求ムル諸件ハ其訴訟ノ本案ニ付キ論辨ヲ為ス前ニ共ニ同時ニ之ヲ述フ可シ
 第百八十七條 遺物相續人、寡婦、又ハ離婚セラルレシ婦或ハ夫ト財産ヲ分チタル婦ハ目錄ヲ記シ且熟考ヲ為ス期限ヲ終リシ後ニ非サレハ其他ノ諸件ヲ述ヘテ訴訟ノ猶豫ヲ求ムルヲ得ス

○第五卷 相手方ノ證書類ヲ受取ル事

第百八十八條 原告人又ハ被告人其相手方ノ

證書類ノ寫ノ送達ヲ得タル時第六十五條見合又ハ

相手方ヨリ之ヲ裁判所ニ出シタル時ヨリ三

日内ニ其代書師ヨリ相手方ノ代書師ニ書面

ヲ送ラレノ相手方ノ用ヒタル證書類ノ正本

ヲ受取ラント求ムルヲ得可シ

第百八十九條 相手方ノ證書類ヲ受取ルニハ

一方ノ代書師人ヨリ相手方ノ代書師ニ受取

書ヲ送リテ之ヲ受取り又ハ相手方ヨリ其證

書類ヲ裁判所ノ書記局ニ預ケ一方ノ者書記

局ヨリ之ヲ受取ル可シ但シ其證書類ハ別ニ

正本アル時又ハ正本ナシト雖モ相手方ノ承

諾アル時ニ非サレハ之ヲ他所ニ携ヘ行ク可

カラス

第百九十條 相手方ノ證書類ヲ受取り之ヲ還

ス可キ期限ハ代書師ノ受取書ヲ以テ之ヲ定

メ又ハ證書類ヲ受取ル可キヲ許シタル言

渡書ヲ以テ之ヲ定ム可シ若シ別段之ヲ定メ

サル時ハ三日内トス

第百九十一條 其期限ノ終リシ後代書師其受
 取タル證書類ヲ還サ、ル時ハ相手方ノ願書
 ニ因リ又ハ相手方ノ覺書ノミニ因リ其代書
 師直チニ其證書類ヲ還ス可ク若シ之ヲ還サ
 、レハ禁錮ヲ受ク可シトノ言渡ヲ得可シ又
 其代書師ハ其言渡書ノ送達ヲ得タル日ヨリ
 後其證書類ヲ還スヲ遲延シタル日毎ニ相手
 方ニ償トレテ三「アラシク」拂ヒ且相手方ノ
 願書及ヒ其言渡書ニ付テノ費用ヲ拂フ可シ
 但シ其代書師ハ其償及ヒ費用ヲ後ニ本人ヨ

リ己レニ償還セシムルヲ得ス
 第百九十二條 若シ代書師此言渡ニ付キ故障
 ヲ述フル時ハ至急吟味ノ法式ヲ以テ之ヲ裁
 判ス可シ但シ其代書師負訴訟ノ時ハ其訴訟
 ノ費用ヲ拂ヒ又ハ其時ノ景狀ニ從ヒ相當ノ
 償ヲ拂ヒ且相當ノ罰ヲ受ク可キノ言渡ヲ受
 ク可シ

○第十章 書類驗真ヲ為ス事
 第百九十三條 私ノ書類ヲ認メシムル事及ヒ
 驗真セシムル事アル時ハ此事ニ付テノ原告

人別ニ裁判役ノ允許ヲ得スシテ三日内ニ此事ニ付テノ被告人ニ其書類ヲ認ムル證書ヲ出サシムル為メ又ハ之ヲ認メタリト為サシムル為メ裁判所ヘノ呼出狀ヲ送ルヲ得可シ

被告人其書類ノ姓名ノ手署ヲ認メタル時ハ之ヲ認ムルノ費用又ハ其驗真ヲ為スニ付テノ費用及ヒ其書類ヲ官署ノ簿冊ニ登記スルノ費用ニ至ル迄皆原告人之ヲ擔當ス可シ

第百九十四條 被告人其書類ヲ認メタル時ハ

裁判所ヨリ原告人ニ被告人其書類ヲ認メタルトノ證書ヲ與フ可シ若シ被告人出席セサル時ハ其者抗傳者ナリトノ言渡ヲ受ケ其書類ヲ認メタルト看做ス可シ

第百九十五條 原告人ヨリ被告人自カラ書類ニ姓名ヲ手署セシト述フル時ニ被告人手署セシトナシト述ヘ又ハ被告人書類ニ他人_{父母}又ハ親ノ手署セシトノ言掛ヲ受ケ其手署ヲ認メスト述フルニ於テハ裁判所ニテ證書又ハ鑑定人及ヒ證人ヲ以テ其姓名ノ手署ノ真

否ヲ證ス可キ言渡ヲ為ス可シ
 第百九十六條 其言渡書ニハ鑒定人三負ニテ
 其真否ヲ證ス可キヲ記ス可シ但シ双方ノ
 者其鑒定人ヲ任スルニ付キ協議セサル時ハ
 裁判所ヨリ之ヲ任ス可シ○又其言渡書ニハ
 其真否ヲ證スル為メノ掛リ裁判役ノ姓名ヲ
 記シ且其證セントスル證書ノ模様ヲ檢視シ
 タル後之ヲ書記局ニ預ケ原告人又ハ其代書
 師ト書記官ト之ニ姓名ノ手署及ヒ其手署ニ
 代用スル横線ヲ畫ス可キヲ附記ス可シ但

シ書記官ハ此等ノ諸事ヲ調書ニ記ス可シ
 第百九十七條 掛リ裁判役又ハ鑒定人ニ付キ
 故障ヲ述フル時ハ此卷ノ第十四章及ヒ第二
 十一章ニ記シタル如ク處置ス可シ
 第百九十八條 真否ヲ證セントスル書類ヲ書
 記局ニ預ケタルヨリ三日内ニ被告人書記局
 ニ至リ之ヲ受取り檢視ス可シ但シ其書類ハ
 之ヲ他所ニ携ハ行ク可カラス○被告人ハ其
 書類ヲ檢視スル時自カラ姓名ノ手署ニ代用
 スル横線ヲ畫シ又ハ其代書師或ハ名代人ヲ

否ヲ證ス可キ言渡ヲ為ス可シ

第百九十六條 其言渡書ニハ鑑定人三員ニテ
其真否ヲ證ス可キヲ記ス可シ但シ双方ノ
者其鑑定人ヲ任スルニ付キ協議セサル時ハ
裁判所ヨリ之ヲ任ス可シ○又其言渡書ニハ
其真否ヲ證スル為メノ掛リ裁判役ノ姓名ヲ
記シ且其證セントスル證書ノ模様ヲ檢視シ
タル後之ヲ書記局ニ預ケ原告人又ハ其代書
師ト書記官ト之ニ姓名ノ手署及ヒ其手署ニ
代用スル横線ヲ畫ス可キヲ附記ス可シ但

シ書記官ハ此等ノ諸事ヲ調書ニ記ス可シ

第百九十七條 掛リ裁判役又ハ鑑定人ニ付キ

故障ヲ述フル時ハ此卷ノ第十四章及ヒ第二

十一章ニ記シタル如ク處置ス可シ

第百九十八條 真否ヲ證セントスル書類ヲ書

記局ニ預ケタルヨリ三日内ニ被告人書記局

ニ至リ之ヲ受取り檢視ス可シ但シ其書類ハ

之ヲ他所ニ携ヘ行ク可カラス○被告人ハ其

書類ヲ檢視スル時自カラ姓名ノ手署ニ代用

スル横線ヲ畫シ又ハ其代書師或ハ名代人ヲ

シテ其横線ヲ畫セシメ書記官其旨ヲ調書ニ記ス可シ

第百九十九條 掛リ裁判役ノ言渡ニ因リ定メタル日ニ至リ先ニ手續ヲ為ス一方ノ者ヨリ其相手方ノ代書師ニ別段任ヲ受ケタル使吏ヲシテ呼出狀ヲ送達セシメ又代書師ヲ任セサル時ハ相手方本人ノ住所ニ其呼出狀ヲ送達セルメ雙方共ニ掛リ裁判役ノ面前ニ出席シ協議シテ真否ヲ證セントスル證書ノ照徴ト為ス可キ書類ヲ定ム可シ若シ此事ニ付テ

原告人出席セサル時ハ真否ヲ證セントスル證書ヲ採用スルヲナク又此事ニ付テ被告入出席セサル時ハ被告人之ヲ認メタルト看做ス可シ○其二箇中何レノ場合ニ於テモ出席ヲ為サル一方ノ者ニ別ニ招書ヲ送達スルヲナク掛リ裁判役ノ申立ニ從ヒ次ノ吟味ノ日ニ裁判所ヨリ其裁判ヲ言渡ス可シ但シ其言渡ハ後ニ故障ヲ述フルヲ得可シ
第二百條 双方ノ者照徴ノ書類ヲ定ムルニ付キ協議セサル時ハ裁判役左ノ諸件ヲ照徴ト

為スヲ許ス可シ

第一 證書人ノ面前ニテ記シタル證書ノ
 姓名ノ手署又ハ裁判役ト書記官トノ面
 前ニテ裁判ノ證書類ニ為シタル姓名ノ
 手署又ハ其事ニ付テノ被告人タル者裁
 判役書記官證書人使吏ノ職務及ヒ其他
 ノ公務ヲ行ヒタルニ付キ書記シ且姓名
 ヲ手署シタル書類

第二 被告人ノ認メタル私ノ書類及ヒ其
 姓名ノ手署

但シ以前驗真ヲ為シテ被告人ノ記シタ
 ルモノナリト定メシ書類ト雖モ被告人
 自カラ認メサル書類ハ照徴ノ書類ト為
 ス可カラス

被告人驗真スヘキ證書ノ一部ノ記
 シタルトナシト述フル時ハ掛リ裁判役
 ヨリ其他ノ部分ヲ照徴ノ為メ用フ可キ
 ノ言渡ヲ為スヲ得可シ

第二百一條 照徴ニ用ヒントスル書類其公ケ
 ノ預リ人又ハ私ノ預リ人ノ手裏ニアル時ハ

掛り裁判役ヨリ別段定ノタル日刻ニ至リ其書類ノ預リ人驗真ヲ為ス場所ニ之ヲ携へ來ル可キトヲ言渡ス可シ但シ其公ケノ預リ人其言渡ニ背ク時ハ禁錮ヲ受ケ私ノ預リ人ハ償ヲ拂ヒ又別段ノ道理アル時ハ禁錮ノ言渡ヲ受ク可シ

第二百二條 照徴ニ用ヒントスル書類ヲ携へ來ルヲ得サル時又ハ其預リ人極テ隔遠ノ地ニアル時ハ裁判所ニテ掛り裁判役ノ申立ノ上檢事ノ説ヲ聽キタル後其預リ人ノ居所又

ハ其居所ニ近キ地ニテ其驗真ヲ為ス可キトヲ言渡シ又ハ定リン猶豫ノ期限内ニ裁判所ヨリ指示ス可キ方法ニテ其書類ヲ裁判所ノ書記局ニ送ル可キトヲ言渡スト自由ナリトス

第二百三條 定マリシ猶豫ノ期限内ニ照徴ノ書類ヲ裁判所ノ書記局ニ送ル可キトヲ言渡シタル時ハ公ケノ預リ人其書類ヲ送ル前ニ校正ヲ為シタル其寫ヲ記シ其預リ人ノ居所ノ地ヲ管轄スル初告裁判所ノ上席人其書類ノ正本ニ據テ其寫ヲ驗真シタル上其旨ヲ調

書ニ記ス可シ○其預リ人ハ其寫ヲ正本ト等ク看做シテ其正本ノ還リ来ル迄之ヲ用フ可ク且其預リ人其寫ノ副本ヲ記シ之ニ調書ノ旨ヲ附記シテ何レノ人ニモ之ヲ渡ス可シ得可シ

其預リ人ハ書類ノ驗真ニ付テノ原告人ヨリ其費用ノ償ヲ得可シ但レ其費用ノ高ハ調書ヲ記シタル裁判役之ヲ定メ其調書ニ從ヒ原告人ヲシテ其費用ヲ償ハシムルノ言渡書ヲ記ス可シ

第二百四條 先ニ手續ヲ為ス一方ノ者ヨリ鑒定人ニ呼出狀ヲ送り掛リ裁判役ノ言渡書ニ定メタル日刻ニ至リ其定メタル場所ニ出テ擔ヲ為シテ其書類ヲ驗真ス可キ事ヲ要メ亦預リ人ニモ呼出狀ヲ送りテ其場所ニ出テ照徵ノ書類ヲ出ス可キヲ要ム可シ又一方ノ者ハ代書師ヨリ相手方ノ代書師ニ招書ヲ送ラシメ相手方ヲ驗真ノ席ニ呼出ス可シ○此等ノ諸件ハ之ヲ調書ニ記シ其調書中ニテ預リ人ニ管シタル部分ヲ抄出シタル寫ト書類

ノ驗真ヲ言渡シタル書ノ寫トヲ預人ニ渡ス
可シ

第二百五五條 預リ人照徴ノ書類ヲ出シタル時
掛リ裁判役ヨリ其預リ人常ニ其書類ヲ預リ
テ驗真ノ席ニ出テ且吟味ノ時毎ニ之ヲ出ス
可キトヲ言渡シ又ハ書記官ノ受取書ヲ得テ
書記官ニ預ク可キトヲ言渡スト自由ナリト
ス○其預リ人書記官ニ其書類ヲ預ケタル時
其者公ケノ預リ人ナルニ於テハ第二百三條
ニ記シタル如ク其寫ヲ記シテ何レノ人ニモ

之ヲ渡ス事ヲ得可シ但シ預リ人其職務ヲ行
フノ權ナキ地ニ於テ其驗真ヲ為ス時ト雖モ
亦同一ナリトス

第二百六條 照徴ノ書類アラサル時又ハ其書
類アリト雖モ照徴ノ用ニ足ラサル時ハ掛リ
裁判役ヨリ原告人出席ノ上又ハ原告人ヲ呼
出シ尚出席セサル上ニテ鑒定人ノ言フ所ヲ
被告人ニ書取ラシムル言渡ヲ為シ其書取ヲ
照徴ノ用ニ供ス可シ

第二百七條 照徴ノ書類ヲ鑒定人ニ渡シ又ハ

被告人鑑定人ノ言フ所ヲ書取リ鑑定人擔ヲ
為シタル後双方ノ者其意ヲ述ヘ及ヒ願ヲ為
シタル上其席ヲ退ク可シ但シ双方ノ述フル
所ハ掛リ裁判役之ヲ調書ニ記ス可シ

第二百八條 鑑定人三頁ハ書記局ニ於テ書記
官ノ面前又ハ別段ノ言渡アル時ハ裁判役ノ
面前ニテ共ニ書類ノ驗真ヲ為ス可シ若シ一
日ニ其業ヲ終フルヲ能ハサル時ハ裁判役又
ハ書記官ヨリ指示シタル日刻ニ之ヲ延ス可
シ

第二百九條 掛リ裁判役ハ鑑定人ノ述フル所
ヲ調書ニ附記シ鑑定人再ヒ擔ヲ為スニ及ハ
スレテ書記官照徴ノ書類ヲ預リ人ニ還シ其
預リ人ハ嘗テ已レノ方ニ取置キタル書記官
ノ受取書ニ書記官ヨリ之ヲ已レノ方ニ還シ
タル旨ヲ記ス可シ
鑑定人ノ職務ヲ行フニ付キ其得可キ謝金ノ
高ハ之ヲ調書ニ附記シ鑑定人ヲシテ原告人
ヨリ其謝金ヲ得セシム可キノ言渡書ヲ渡ス
可シ

第二百十條 鑑定人三頁ハ其説ヲ連名ノ書ニ
 記シ之ニ其趣意ヲ附記ス可シ但シ其鑑定人
 中ノ一頁他ノ二頁ト其説異ナルト雖モ二人
 ノ説ニ從フ可シ
 若シ三頁ノ説各異ナル時ハ其説ヲ記シタル
 書ニ各其趣意ヲ記ス可シ然モ甲ノ説ハ云々
 乙ノ説ハ云々タルトテ記ス可カラズ
 第二百十一條 驗真ノ書類ヲ記シ又ハ姓名ヲ記
 スルヲ旁視セル人又ハ驗真ヲ為スノ端緒ヲ
 知リタル人ハ證人トシテ之ヲ呼出ストテ得

可レ

第二百十二條 證人ノ説ヲ聽ク時被告人ノ記
 シタルトナシト述フル書類又ハ認メスト述
 フル書類ヲ證人ニ示シ證人ハ之ニ姓名ノ手
 署ニ代用スル横線ヲ畫シ其旨ヲ附記ス可シ
 若シ證人其横線ヲ畫スルトテ承諾セサル時
 ハ其旨ヲモ亦附記ス可シ但シ其他ノ規則ハ
 證人吟味ノ箇條ニ記シタル所ニ循フ可シ
 第二章見
 第二百十三條 書類ヲ記シタルト又ハ姓名ノ

手署ヲ為シタルトナシト述フル被告入其書類ヲ記レ又ハ手署ヲ為シタルノ證アル時ハ裁判所ヨリ百五十「フラン」ノ罰金ヲ出レ且相手方ニ裁判ノ費用及ヒ損失ノ償ヲ拂フ可キノ言渡ヲ為シ若シ其言渡ニ従ハサル時ハ之ヲ禁錮スル「ト」ヲ得可シ又其被告入ヨリ主タル訴訟ニ付キ相手方ニ損失ノ償ヲ拂ハシムル為メ其被告入ヲ禁錮スルノ言渡ヲ為ス「ト」ヲ得可シ

○第十一章 書類ノ贋造タル「ト」ヲ主タ

ル訴訟ニ添へ訴フル事此書類贋造ノ訴ハ民法上ノ訴ニシテ贋造人ノ罪ヲ刑法裁判所ニ訴フルトハ異ナレリ

第二百十四條 訴訟ノ時間送達ヲ受ケ又ハ裁判所ノ書記局ニテ檢視シ又ハ一方ヨリ差出シタル書類ノ贋造又ハ變造ナル「ト」ヲ述ント欲スル者ハ之ヲ訴フル「ト」ヲ得可シ但レ以前ノ訴訟ノ時既ニ其書類ノ驗真ヲ為シ其真正ナルノ言渡アリシ後ト雖モ更ニ之ヲ贋造又ハ變造ナリト訴フル「ト」ヲ得可シ然レモ一度既ニ贋造又ハ變造ナリト訴ヘ其吟味ニ因リ

贋造又ハ變造ナラサルノ言渡アリレ時ハ格別ナリトス

第二百十五條 書類ノ贋造タルヲ訴ヘント欲スル者ハ其代書師ヨリ相手方ノ代書師ニ招書ヲ送ラレメ相手方其書類ヲ用ヒント欲スルヤ否ノ答ヲ得ント要ム可レ但レ其代書師ノ招書ニハ相手方其書類ヲ用フルニ於テハ其贋造ノ訴ヲ為ス可キヲ附記ス可シ

第二百十六條 其時ヨリ八日内ニ相手方其代書師ヲレテ此事ニ付テノ原告人ノ代書師ニ

答書ヲ送ラレメ贋造ナリト述フル書類ヲ用フルト否トヲ答フ可レ但レ其答書ニハ本人自カラ姓名ヲ手署シ又ハ別段公正ノ證書ヲ以テ任シタル名代人姓名ヲ手署ス可レ且其名代人姓名ヲ手署シタル時ハ其任ヲ受ケタル公正ノ證書ノ寫ヲ答書ニ添テ送ル可レ

第二百十七條 此事ニ付テノ被告入其答ヲ為スヲナク又ハ書類ヲ用ヒサルヲ答フル時ハ此事ニ付テノ原告人其代書師ヨリ被告人ノ代書師ニ吟味ノ席ニ出席ス可キ招書ヲ送

ラシメ其出席ノ上ニテ贋造ナリト述ヘタル
 書類ハ被告人ニ問合ヲ為シタル上ニテ之ヲ
 棄却スルノ言渡ヲ得可シ但シ其原告人ハ其
 事ニ付キ己レノ相當ト思量スル道理ヲ述ベ
 又其損失ノ償ヲ得可キノ要メヲ為スルヲ得
 可シ

第二百十八條 若シ此訴ニ付テノ被告人其證
 書類ヲ用ヒント欲スルヲ答フル時ハ原告
 人其姓名ヲ手署シタル書又ハ別段公正ノ證
 書ヲ以テ任シタル名代人ノ姓名ヲ手署セシ

書ヲ書記局ニ出シテ其書類ノ贋造ナルヲ
 訴フ可シ但シ原告人ハ其代書師ヨリ相手方
 ニ招書ヲ送ラシメ吟味ノ席ニ出ツ可キヲ
 要メ且其贋造ノ訟ヲ為ス免許ト之ヲ吟味ス
 可キ掛リ裁判役ヲ任スル言渡トヲ得ンルヲ
 願フ可シ

第二百十九條 被告人ハ贋造ノ訟ヲ為スノ允
 許ト掛リ裁判役ヲ任シタル旨トヲ記シタル
 言渡書ヲ原告人ヨリ受取リタル後三日内ニ
 原告人ノ贋造ナリト述ヘタル書類ヲ書記局

ニ出レ且之ヲ出レタル旨ヲ記シタル書面ヲ
三日内ニ原告人ニ送達ス可シ

第二百二十條 被告人前條ニ記シタル期限内

ニ其條ニ定メタル如ク行ハサル時ハ原告人

第二百十七條ニ記シタル所ニ循ヒ贖造ナリ

ト述ヘタル書類ヲ棄却セシムル言渡ヲ得可

キ為メ被告人ヲシテ吟味ノ席ニ出テシム可

レ又外ニ其書類ヲ預ル者アリテ原告人其者

ヨリ其書類ヲ書記局ニ出タサシメント欲ス

ル時ハ已レノ費用ヲ以テ之ヲ為サシムル

ヲ得後ニ其費用ヲ被告人ヨリ償ハシム可シ
但シ裁判所ヨリ原告人ニ被告人其費用ノ償
ヲ為ス可キ裁判執行書ヲ與フ可シ

第二百二十一條 贖造ナリト述ヘタル書類ノ

正本アル時ハ掛リ裁判役原告人ノ求メニ因

リ被告人ニ定期内ニ其正本ヲ書記局ニ出ス

ノ手續ヲ為ス可キトヲ言渡シ其正本ノ公ケ

ヲ預リ人之ヲ出サ、ル時ハ之ヲ禁錮シ私ノ

預リ人之ヲ出サ、ル時ハ其財産ヲ抵償トレ

テ差押ヘ及ヒ罰金ヲ出サシメ又格別ノ道理

アル時ハ之ヲ禁錮ス可キノ言渡ヲ為スヲ得可シ

第二百二十二條 裁判所ニテハ掛リ裁判役ノ申立ニ從ヒ其正本ヲ出スヲ待スニテ贋造ノ訴ヲ繼續ニ行フ可キノ言渡ヲ為スヲ得可シ又其正本ヲ出スヲ得サル時又ハ其正本ヲ竊取セラレ及ヒ失ヒタル證アル時ハ裁判所ニテ相當ノ裁判言渡ヲ為スヲ得可シ
第二百二十三條 正本ヲ出ス可キ期限ハ之ヲ有スル者ノ住所ニ其正本ヲ出ス可キノ言渡

書ヲ送達シタル日ヨリ之ヲ算フ可シ
第二百二十四條 被告人其正本ヲ出ス可キノ手續ヲ為ス可キ期限ハ其代書師原告人ヨリ之ヲ出ス可キ言渡書ノ送達ヲ得タル日ヨリ之ヲ算フ可シ若シ被告人其期限内ニ其正本ヲ出スニ付キ必要ノ手續ヲ為サ、ル時ハ原告人第二百十七條ニ記シタル如ク裁判言渡ヲ得ント求ムルヲ得可シ
被告人ハ其正本ヲ出ス可キ言渡書ノ送達ヲ得其寫ヲ定期内ニ其正本ノ預リ人ニ送達ス

ルヲ以テ前ニ記シタル手續ヲ行フタリトス
可シ但シ被告人ハ別ニ其言渡書ノ寫ヲ書記
局ヨリ得ルニ及ハス

第二百二十五條 被告人原告人ノ贋造ナリト
述ヘタル書類ヲ書記局ニ出シタル後其旨ヲ
招書ニ記シテ之ヲ原告人ノ代書師ニ送達シ
其書類ノ模様ノ調書ヲ記スル時原告人裁判
所ニ出席ス可キ事ヲ要ム可シ但シ其調書ハ
招書ノ送達ヲ為シタルヨリ三日内ニ之ヲ記
ス可シ

原告人ヨリ其贋造ナリト述ヘタル書類ヲ書
記局ニ出シタル時ハ原告人被告人ノ調書ヲ
記スル時出席ス可キノ要メヲ為シタル上ニ
テ其書類ヲ出シタルヨリ三日内ニ其調書ヲ
記ス可シ

第二百二十六條 贋造ナリト述ヘタル書類ノ
正本ヲ出ス可キノ言渡ヲ為シタル時ハ前ニ
記シタル定期内ニ其正本及ヒ副本ノ模様ノ
調書ヲ同時ニ記ス可シ但シ裁判所ニテハ其
時ノ必要タルニ從ヒ其正本ヲ出スヲ待タス

レテ先ツ其副本ノ模様ノ調書ヲ記スル言渡レ
 ヲ為シ後ニ正本ノ調書ヲ記スルヲ得可レ
 第二百二十七條 調書ニハ其書類中ノ塗抹旁
 書、書入及ヒ其他此類ノ諸件ヲ記ス可レ○此
 調書ハ檢事及ヒ原告被告ノ面前又ハ別段公
 正ノ證書ヲ以テ任シタル其名代人ノ面前ニ
 テ掛リ裁判役之ヲ記ス可レ○原告人贋造ナ
 リト述ヘタル書類及ヒ其正本ハ掛リ裁判役
 檢事及ヒ原告被告之ニ其姓名ノ手署ニ代用
 スル横線ヲ畫ス可レ若シ原告人又ハ被告人

其事ヲ為スヲ得ス或ハ之ヲ欲セサル時ハ
 其旨ヲ記ス可レ○原告又ハ被告ノ一方出席
 セサル時ハ抗傳者タルノ言渡ヲ為シテ調書
 ニ取掛ル可レ

第二百二十八條 贋造ノ訴訟ノ原告人又ハ其
 代書師ハ訴訟ノ時間何時ニ限ラス其贋造ナ
 リト述ヘタル書類ヲ書記局ニ至リ檢視スル
 ヲ得可レ然レモ其書類ハ之ヲ他所ニ携ヘ
 行ク可カラス直チニ之ヲ書記官ニ還ス可レ
 第二百二十九條 調書ヲ記シタルヨリ八日内

原告人ヨリ被告人ニ書類ノ贋造タル憑據
 ヲ述フル辨論書ヲ送達ス可シ但シ其辨論書
 ニハ書類ノ贋造又ハ變造ナルヲ證ス可キ事
 柄及ヒ其模様ヲ記ス可シ若シ原告人八日
 内ニ之ヲ為サハル時ハ被告人ヨリ原告人ニ吟
 味ノ席ニ出ツ可キヲ要ムル招書ヲ送テ裁
 判所ヨリ其模様ニ因リ原告人ニ其贋造ノ訴
 訟ヲ為ス可カラサル言渡ヲ為スヲ願フヲ
 得可シ

第二百三十條 被告人ハ原告人ヨリ書類ノ贋

造タル憑據ヲ述フル辨論書ノ送達ヲ得タル
 ヨリ八日内ニ原告人ニ答辨書ヲ送ル可シ然
 ラサル時ハ原告人第二百十七條ニ記シタル
 如ク裁判所ヨリ書類棄却ノ言渡ヲ得可キ為
 メ被告人ニ吟味ノ席ニ出ツ可キヲ要ムル
 招書ヲ送ルヲ得可シ

第二百三十一條 其答書ヲ送リタルヨリ三日
 内ニ一方ノ者吟味ノ席ニ其相手方ノ出席ス
 可キ要メヲ為スヲ得可シ裁判所ニテハ贋
 造訴訟ノ憑據ノ全部又ハ一部ヲ取上ケ又ハ

之ヲ棄却ス可シ○其贋造訴訟ノ憑據中一部
 ヲ取上ケ其他ノ一部ニ疑ハシキ所アル時ハ
 其疑ハシキ一部ヲ取上ケタル一部ニ合シ後
 ニ之ヲ取調ヲ可キトテ言渡ス可シ若シ其全
 部ヲ棄却シテ猶其中ニ取調ヲ可キ部分アル
 時ハ其部分ヲ主タル訴訟ニ合シテ取調ヲ可
 キトテ言渡ス可シ但シ此等ノ諸事ハ其憑據
 ノ輕重ト其時ノ必要ト為ス所トニ從テ之ヲ
 為ス可シ

第二百三十二條 裁判所ノ言渡書ニハ原告人

ニハ其述フル憑據中裁判所ニテ取上ケタル
 所ヲ掛リ裁判役ノ面前ニテ證書又ハ證人ヲ
 以テ證ス可キトテ記シ又被告人ニハ之ニ反
 シタル證ヲ立ツ可キトテ記シ且裁判所ノ職
 務ヲ以テ任シタル鑑定人三員ヲシテ原告人
 贋造ナリト述フル書類ヲ驗真セシム可キト
 テ記ス可シ

第二百三十三條 裁判所ニテ取上ケタル贋造
 訴訟ノ憑據ハ其證ヲ立ツ可キトテ命スル言
 渡書ニ之ヲ記シ其棄却シタル箇條ハ其證ヲ

立ッルヲ得ス但シ鑑定人ハ原告人ノ贋造
 ナリト述ハタル書類ニ付キ其職務ノ為ニ相
 當ト思量スル注意ヲ為シ裁判役ハ鑑定人ノ
 述フル所ヲ適宜ニ聽用スルヲ得可シ
 第二百三十四條 證人ノ述フル所ヲ聽糺スニ
 付テハ證人吟味ノ事ニ付キ後ニ記スル所ノ
 法式ニ循フ可シ但シ原告人ノ贋造ナリト述
 ハタル書類ヲ證人ニ示シ證人ハ之ニ姓名ノ
 手署ニ代用スル横線ヲ畫ス可シ若シ證人之
 ヲ欲セサル時ハ其旨ヲ記ス可シ

照徴ノ書類及ヒ其他鑑定人ニ示ス可キ書類
 ハ掛リ裁判役ノ意ニ從ヒ證人ニモ亦之ヲ示
 ストヲ得可シ但シ證人之ヲ視タル時ハ前ニ
 記シタル如ク之ニ姓名ノ手署ニ代用スル横
 線ヲ畫ス可シ

第二百三十五條 證人證ヲ述フル時ニ當リ證
 書類ヲ出シタル時ハ掛リ裁判役ト證人ト之
 ニ姓名ノ手署ニ代用スル横線ヲ畫シタル後
 其證書ヲ證人ノ述フル所ヲ記シタル書ニ添
 ハ置ク可シ又其證人ヨリ出シタル證書ヲ以

テ原告人ノ贋造ナリト述ヘタル書類ノ真偽ノ證ヲ立ツ可キ時ハ其證書ヲ知りタル他ノ證人ニ之ヲ示シ其證人ハ前ニ記シタル如ク之ニ姓名ノ手署ニ代用スル横線ヲ畫ス可シ

第二百三十六條 鑑定人其鑑定ヲ為スニ付テハ左ノ法式ニ循フ可シ

第一 照徴ノ書類ハ双方協議シテ之ヲ定メ又ハ第二百條ニ記シタル如ク裁判役ヨリ之ヲ定ム可シ

第二 贋造ノ訴ヲ為スレテ允許シタル言

渡書贋造ナリト述ヘタル書類其模様ノ調書贋造ノ訴ヲ為ス憑據ヲ取上ケ且鑑定人ヲシテ鑑定ヲ為サシムルヲ命シタル言渡書照徴ノ書類アルニ於テハ其書類其照徴ノ書類ヲ書記官ノ受取リタル證書及ヒ照徴ノ書類ヲ定ムル言渡書ハ鑑定人ニ之ヲ渡ス可シ但シ鑑定人ハ其鑑定書ニ前ノ書類ヲ受取テ其取調ヲ為シタル旨ヲ附記シ別ニ其受取ノ調書ヲ記スルヲナカル可シ又其鑑定人ハ原告

人ノ贋造ナリト述ハタル書類ニ其姓名ノ手署ニ代用スル横線ヲ畫ス可シ
 又證人其述フル所ヲ記シタル書ニ證書ヲ添ヘ差出シタル時ハ一方ノ者其證書ヲ鑑定人ニ示ス可キヲ求メ掛リ裁判役ハ之ヲ言渡スヲ得可シ

第三 其他鑑定ノ規則ニ付テハ前章ニ記シタル法式ニ循フ可シ

第二百三十七條 掛リ裁判役又ハ鑑定人ニ付キ故障ヲ述フル時ハ此卷ノ第十四章及ヒ第

二十一章ニ記シタル如ク之ヲ處置ス可シ
 第二百三十八條 贋造訴訟ノ吟味終リシ時ハ一方ノ代書師ヲシテ其相手方ノ代書師ニ招書ヲ送ラシメ裁判言渡ノ席ニ出ルヲ要ム可シ

第二百三十九條 贋造ノ訴訟ニ因リ贋造又ハ變造ノ証ヲ得タル時其首謀又ハ附従ノ猶生存シ且治罪法ノ規則ニ循ヒ其罪犯ヲ訴出ス
 一ヲ得可キ期限内ナル時ハ裁判所ノ上席人其犯人ニ對シテ引出狀ヲ出シ且此事ニ付キ

司法警察官吏ノ職務ヲ行フ可シ

第二百四十條 前條ノ場合ニ於テハ贋造罪犯

ニ付キ刑事ノ言渡アルニ至ル迄贋造ニ付テ

ノ民事ノ訴訟ノ裁判ヲ暫ク延ス可シ

第二百四十一條 贋造訴訟ノ裁判ヲ為シ其贋

造ノ書類ノ全部又ハ一部ヲ引裂キ又ハ塗抹

シ又ハ之ヲ更改ス可キヲ言渡シタル時ト

雖モ被告人法ニ適シテ其言渡ニ承服シタル

トテ述フル迄ノ時間又ハ被告人之ヲ控訴シ

又ハ終審ノ裁判ヲ取消ス可キヲ願出テ第四百八

十條見又ハ覆審院ニ訴出ス一ヲ得可キ時間

ハ之ヲ引裂キ又ハ塗抹シ又ハ之ヲ更改スル

トテ延ス可シ

第二百四十二條 贋造訴訟ノ裁判言渡書ニハ

其書類ヲ本人又ハ之ヲ出シタル證人ニ還ス

可キトテ附記ス可シ但シ原告人ノ贋造ナリ

ト述ハタル書類モ若シ贋造タルノ裁判ヲ受

ケサル時ハ亦之ヲ還ス可シ又公ケノ預リ人

ノ出シタル書類ハ親シク之ヲ其預リ人ニ還

シ又ハ裁判所ヨリ定メタル方法ヲ以テ書記

官ヨリ其預リ人ニ送還ス可キヲ言渡ス可
シ○其書類ヲ還ス可キヲ付テハ別ニ言渡
ヲ為スニ及ハスト雖氏前件ニ記シタル期限
ノ後ニ非サレハ之ヲ還スヲ得ス

第二百四十三條 又同上ノ期限内ニハ照徴ノ
書及ヒ其他ノ書類ヲ還スヲ延ス可シ但シ
此等ノ書類ノ預リ人又管係アル者ノ願ニ因
リ裁判所ヨリ此等ノ書類ヲ還ス可キヲ別
段言渡シタル時ハ格別ナリトス

第二百四十四條 書記官ハ必ス前數條ノ規則

ニ循フ可シ但シ之ニ背キタル時ハ定期ノ時
間其職ヲ行フノ禁ヲ受ケ且百「フラン」ヨリ
少カラサル罰金ノ言渡及ヒ一方ノ者ニ損失
ノ償ヲ拂フ可キノ言渡ヲ受ケ又格別ノ道理
アル時ハ犯罪ノ訴ヲ受ク可シ

第二百四十五條 證書類ノ書記局ニアル間ハ
原告人ノ贋造ナリト述ヘタル書類ニ付テハ
書記官別段裁判所ノ允許ヲ得スシテ其寫ヲ
渡ス可カラス又書記局ニ預リタル照徴ノ書
類ノ正本並ニ其他ノ書類ノ正本及ヒ贋造ナ

リト述ヘタルモノニ非ザル諸般ノ證書ヲ記シタル簿冊ニ付テハ書記官其寫ヲ求ムルノ理アル者ニ之ヲ渡スルヲ得可シ但シ書記官ハ通常其書類又ハ簿冊ヲ預ル者ノ得可キ謝金ヨリ更ニ多分ノ謝金ヲ受クルルヲ得ス○此條ニ記スル所ノ規則ニ背キタル書記官ハ前條ニ等シキ罰ヲ受ク可シ書類ノ正本ヲ預ル者第二百三條ニ循ヒ其正本ニ代用ス可キ寫ヲ記シタル時ハ其預リ人ニ非サレハ其寫ノ副本ヲ人ニ渡スルヲ得ス

第二百四十六條 贋造訴訟ノ原告人負訴訟トナリシ時ハ三百フランクヨリ少カラサル罰金ヲ拂ヒ且被告人ニ相當ノ損失ノ償ヲ拂フ可キノ言渡ヲ受ク可シ

第二百四十七條 原告人書記局ニ書類贋造ノ訴狀ヲ出シ其訴ヲ為スノ允許ヲ得タル後自カラ其訴ヲ止メタル時又ハ負訴訟トナリタル時又ハ原告人其書類ノ贋造タルヲ述スル憑據及ヒ確證ノアラサルニ因リ或ハ原告人前ニ記シタル訴訟ノ手續及ヒ法式ヲ為サ

サルニ因リ裁判所ヨリ其訴ヲ止ム可キトヲ
 言渡シタル時ハ原告人同上ノ罰金ヲ拂フ可
 ン但シ其言渡書ノ如何ナルヲ問ハス且其言
 渡書ニ罰金ヲ拂フ可キトヲ記シタルトナシ
 ト雖モ原告人必ス之ヲ拂フ可ク又原告人書
 贖造ノ罪犯ヲ刑法裁判所ニ訴フルトヲ述フ
 ル時ト雖モ其罰金ヲ拂ハサル可カラス
 第二百四十八條 原告人贖造ナリト述ヘタル
 書類ノ全部又ハ一部ヲ裁判所ニテ贖造ナリ
 ト言渡シタル時又ハ其書類ヲ主タル訴訟ニ

用フ可カラサルトヲ言渡シタル時又ハ贖造
 ノ訴ヲ為ストヲ裁判所ニテ允許セサリシ時
 ハ原告人前條ノ罰金ヲ出スニ及ハス但シ裁
 判所ニテ贖造ノ訴ヲ為ストヲ免許セサル言
 渡書ニ如何ナル文詞ヲ記シタル時ト雖モ亦
 同一ナリトス
 第二百四十九條 書類贖造ノ訴訟ニ付キ原告
 被告互ニ和解シテ其訴ヲ止メント欲スルト
 雖モ其和解ノ旨ヲ檢察官ニ告知シ裁判所ニ
 テ之ヲ允許シタル上ニ非サレハ其和解ノ如

ク行フヲ得ス但シ檢察官ハ此事ニ付キ其
相當ト思量スル所ヲ裁判所ニ申立ルヲ得
可シ

第二百五十條 訴訟法ニ循ヒ書類贋造ノ民事
訴ヲ為ス者ハ其贋造ヲ罪犯トシ更ニ之ヲ刑
法裁判所ニ訴フルヲ得可シ但シ民法裁判
所ニテハ原告人ノ贋造ナリト述ヘタル書類
ニ管セス其民事ノ訴ヲ裁判シ得可シト思量
シタル時ノ外刑法裁判所ノ裁判アルニ至ル
迄其民事ノ訴ノ裁判ヲ延ハス可シ

第二百五十一條 書類贋造ノ訴訟手續中ノ言
渡又ハ駁定ノ裁判言渡ハ檢察官ノ説ヲ聽カ
スレテ之ヲ為ス可カラス

○第十二章 證人吟吟ノ事

第二百五十二條 原告人又ハ被告人證人ヲ以
テ證セシメント欲スル諸件ハ別ニ論辯書又
ハ願書ヲ添フルヲナク代書師ヨリ代書師ニ
送達スル趣意書ニ箇條ヲ分テ之ヲ記ス可シ
又相手方ニテハ三日内ニ其代書師ヨリ一方
ノ代書師ニ其答書ヲ送ラシメ一方ノ者ノ趣

意書ニ記シタル所ヲ知ラスト述ヘ又ハ之
認ム可シ若シ三日内ニ之ヲ為サ、ル時ハ其
諸件ヲ認メタルト看做ス、ヲ得可シ

第二百五十三條 一方ニテ證人ヲ以テ證ヲ立
ント欲スル諸事ヲ裁判所ニテ不相當ナリト
為ス、ナキ時相手方ニテ之ヲ知ラスト述フ
ルニ於テハ證人ヲ以テ證ヲ立テシム可キ、
ヲ言渡ス可シ但シ法律上ニテ別段之ヲ禁シ
タル場合ハ格別ナリトス

第二百五十四條 又裁判所ヨリ其相當ナリト

思量スル諸事ニ付キ證人ヲ以テ證ヲ立テレ
ム可キ、ヲ其職務ヲ以テ言渡ス、ヲ得可シ
但シ法律上ニテ別段禁シタル場合ハ格別ナ
リトス

第二百五十五條 證人ヲ以テ證ヲ立テシム可
キ言渡書ニハ左件ヲ記ス可シ

第一 證ヲ立ツ可キ諸件

第二 證人ノ證ヲ聽ク可キ掛リ裁判役

若シ證人ノ住所餘リ遠隔ナル時ハ別段定メ
タル裁判所ノ裁判役ノ面前ニテ證人其證

述ヲ可キ言渡ヲ為スヲ得可シ

第二百五十六條 相手方ニテハ之ニ及シタル

證ヲ立ルヲ當然ナリトス但シ原告人及ヒ被

告人ノ證ヲ立ル期限ハ後ノ數條ニ記スル所

ニ循フ可シ

第二百五十七條 證人ヲ以テ證ヲ立テシム可

キヲ言渡シタル其地ニ於テ證人其證ヲ述

フ可キ時又ハ其地ヨリ三「ミリヤメートル」ノ

距離内ニ於テ其證ヲ述フ可キ時ハ一方ノ代

書師其言渡書ノ送達ヲ得タル日ヨリ八日内

ニ證人吟味ノ手續ヲ為シ始ム可シ若シ本人

代書師ニ任セサル時ハ本人其送達ヲ得又ハ

其住所ニ其送達ヲ得タル日ヨリ其八日ノ期

日ヲ算フ可シ又其言渡書ヲ送達シタル一方

ノ者モ亦同一ノ期日内ニ其手續ヲ為シ始ム

可シ若シ此規則ニ背ク時ハ證人ノ述ハタル

證ノ功ナカル可シ○若シ證人ヲ以テ證ヲ立

ルヲ一方ニ許シタル言渡ヲ其相手方ニテ

故障ヲ述フルヲ得可キ時ハ其故障ヲ述フル

ヲ得可キ期限ノ終リシ時ヨリ前ニ記シ

ル期日ヲ算フ可シ

第二百五十八條、前條ニ記シタルヨリ更ニ隔
リタル地ニ於テ證人吟味ノ手續ヲ為シ始ム
可キ時ハ裁判所ノ言渡書ニ其手續ヲ為シ始
ム可キ期日ヲ定ム可シ

第二百五十九條、一方ノ者定マリシ日刻ニ證
人ヲ出席セシム可キ言渡書ヲ掛リ裁判役ヨ
リ得タル時ハ既ニ證人吟味ノ手續ヲ為シ始
メタルト看做ス可シ○故ニ掛リ裁判役ハ双
方ノ證人吟味ノ調書ニ双方ノ者其言渡書ヲ

得ント求メタルニ因リ之ヲ渡シタル旨ヲ記
ス可シ

第二百六十條、證人ノ呼出狀ハ其證人又ハ其
住所ニ送ル可シ○証人吟味ヲ為ス場所ヨリ
三「ミリヤメートル内ニ住スル者ニハ吟味ヨ
リ少クトモ一日前ニ呼出狀ヲ送り更ニ隔リ
タル地ニ住スル者ニ付テハ三「ミリヤメートル
毎ニ一日ノ猶預ヲ加フ可シ○言渡書ノ中
ニテ裁判所ヨリ證ヲ立ルヲ許ルシタル箇
條ヲ記セシ部分ノ寫及ヒ掛リ裁判役ノ言渡

書ノ寫ヲ本人ヨリ證人ニ送ル可シ但シ證人ニ此等ノ書類ヲ送達セサル時ハ其證人ノ述ヘタル證ノ效ナカル可シ

第二百六十一條 相手方代書師ヲ任シタル時ハ一方ノ者ヨリ相手方代書師ノ住所ニ呼出狀ヲ送リ又之ヲ任セサル時ハ相手方本人ノ住所ニ呼出狀ヲ送リテ其本人ニ證人吟味ノ席ニ出ツ可キヲ要ム可シ但シ其呼出狀ハ證人ヲ吟味スル日ヨリ少クトモ三日前ニ送ル可シ又其呼出狀ニハ一方ノ者ヨリ出サシ

トスル證人ノ姓名、職業、住所ヲ記ス可シ若シ此規則ニ背ク時ハ其證人ノ述ヘタル證ノ效ナカル可シ

第二百六十二條 證人ハ双方本人ノ面前ト其在ラサル所トヲ問ハス各自ニ其證ヲ述フ可シ

各證人ハ其證ヲ述フル前ニ其姓名、職掌、年齢、居所ヲ述ヘ及ヒ本人ノ何級ノ血屬及ヒ姻屬ノ親タルヲ又ハ本人ノ從者、僕婢タルヲ述ヘ其後誠實ヲ言フ可キノ誓ヲ為ス可シ但シ

此規則ニ背キテ證人ノ述ハタル證ハ其效
カル可シ

第二百六十三條 呼出ヲ受ケテ出席ヲ為サハ
ル證人ハ掛リ裁判役ヨリ本人ニ十フランク
ヨリ少カラサル損失ノ償ヲ拂フ可キ言渡ヲ
受ク可シ但シ其言渡ハ之ニ付キ故障ヲ述ヘ
又ハ之ヲ控訴スルニ管セズ之ヲ執行フ可シ
○又其裁判役ヨリ其證人ニ前ノ言渡ト共ニ
百フランクヨリ多カラサル罰金ヲ言渡ス
ヲ得可シ

出席ヲ為サル證人ハ其費用ニテ再ヒ出席
ス可キノ呼出ヲ受ク可シ

第二百六十四條 再ヒ呼出ヲ受ケタル證人猶
出席ヲ為サル時ハ百フランクノ罰金ヲ拂
フ可キノ言渡ヲ受ケ若シ之ヲ拂ハサル時ハ
禁錮ヲ受ク可シ又掛リ裁判役ハ其證人ニ對
シ引出狀ヲ出スヲ得可シ

第二百六十五條 證人預定ノ日ニ出席スル
能ハサリシ道理ヲ辨明シタル時ハ掛リ裁判
役其證人ヲシテ證ヲ述ハシタル後其罰金

及ヒ再ヒ呼出狀ヲ送リタル費用ヲ免ルル可
キトヲ言渡ス可シ

第二百六十六條 若シ證人預定ノ日ニ出席ス
ルヲ能ハサル可キ道理ヲ辨明シタル時ハ掛
リ裁判役證人ニ相當ノ猶豫ヲ許シ又ハ自カ
ラ證人ノ住所ニ至リ其述フル所ヲ聽ク可シ
但シ猶豫ノ期限ハ證人吟味ノ期日第二百七
十條見
令ニ過ク可カラス○若シ證人ノ住所隔遠ナ
ル時ハ掛リ裁判役其住所ノ裁判所ノ上席人
ニ其證人ノ述フル所ヲ聽ク可キトヲ托ス可

シ但シ其上席人ハ自カラ之ヲ聽キ又ハ別段
其事ヲ為ス可キ裁判役ヲ任ス可シ○其裁判
所ノ書記官ヨリハ證人吟味ノ調書ノ正本ヲ
訴訟ヲ管スル裁判所ノ書記局ニ直ニ送達シ
且同上ノ書記官ハ其裁判所ヨリ證人ヲ出シ
タル本人ヲシテ諸般ノ手續ノ費用ヲ償ハシ
ム可キ書ヲ受取ル可シ

第二百六十七條 證人數人ノ述フル所ヲ同日
ニ聽キ終ルトヲ得サル時ハ掛リ裁判役ヨリ
定メタル日刻迄其中ノ者ノ吟味ヲ延ハス可

レ但レ相手方本人ノ出席セサル時ト雖モ其本人及ヒ證人ニ更ニ呼出狀ヲ送ルニ及ハス
 第二百六十八條 本人ノ宗系ノ血屬及ヒ姻屬ノ親又ハ既ニ離婚シタル者ト雖モ其配偶者ハ證人トシテ呼出ス可カラス

第二百六十九條 證人吟味ノ調書ニハ之ヲ為シタル日刺、双方本人及ヒ證人ノ出席ヲ為シタルト否トノ事證人其呼出狀ヲ差出シタル事又吟味ヲ延シタル時ハ其延シタル日刺ヲ記ス可シ若シ此等ノ事ヲ記セサル時ハ其調

書ノ効ナカル可シ

第二百七十條 一方ノ者證人ニ付キ故障ヲ述ヘントスル時ハ證人ノ其證ヲ述フル前ニ之ヲ為ス可シ但レ故障ノ申述ハ詳明ニシテ且其時ノ事柄ニ適當ス可キ疑ハシキ語ヲ用フ可カラス又證人ハ之ニ答ヘテ辯論スルヲ得可シ○證人ニ付テノ故障ノ申述及ヒ證人ノ答辯ハ之ヲ調書ニ附記ス可シ
 第二百七十一條 證人ハ口上ニテ其證ヲ述フ可シ書面ヲ以テ之ヲ述フ可カラス○其述ハ

タル所ハ之ヲ調書ニ記シテ證人ニ讀聞セ其
 記セシ如クニテ差支ナキヤヲ問フ可シ但シ
 此等ノ法式ヲ行ハサル時ハ其調書ノ効ナカ
 ル可シ○又此時證人ニ費用ノ償ヲ得ント求
 ムルヤ否ヲ問フ可シ
 第二百七十二條 證人ハ其述ハタル所ヲ記シ
 タル調書ヲ讀聞セラレシ時已レノ相當ト思
 慮スル所ノ更改及ヒ増加ヲ述フルトヲ得可
 レ但シ其更改及ヒ増加ハ之ヲ其調書ノ紙尾
 又ハ紙端ニ附記シテ又之ヲ讀聞セ且其讀聞

セタル旨ヲモ附記ス可シ若シ此等ノ法式ヲ
 行ハサル時ハ其調書ノ効ナカル可シ
 第二百七十三條 掛リ裁判役ハ自己ノ職務ニ
 因リ又ハ双方本人或ハ一方本人ノ願ニ因リ
 證人ノ述フル所ヲ明白ナラシムルニ相當ト
 思慮スル所ヲ問糺シ其證人ノ答フル所ヲ書
 面ニ記シテ之ヲ讀聞カセ其後證人ヲシテ之
 ニ姓名ヲ手署セシメ若シ姓名ヲ手署スルト
 ヲ欲セス又ハ能ハサル旨ヲ述フル時ハ其旨
 ヲ附記ス可シ但シ其答書ニハ掛リ裁判役及

書記官モ亦其姓名ヲ手署ス可シ若シ是等ノ法式ヲ行ハサル時ハ其答書ノ効ナカル可シ

第二百七十四條 調書中ニテ證人ノ述ハタル所及ヒ後ニ其更改又ハ増加シタル所ヲ記シタル部ハ證人裁判役書記官之ニ姓名ヲ手署ス可シ若シ證人手署スルヲ欲セス又ハ能ハサル時ハ其旨ヲ附記ス可シ若シ此法式ヲ行ハサル時ハ其調書ノ効ナカル可シ○證人其費用ノ償ヲ求ムル時ハ亦其費用ノ高ヲ

附記シ若シ之ヲ求メサル時ハ亦其旨ヲ附記ス可シ

第二百七十五條 其調書ニハ第二百六十一條第二百六十二條第二百六十九條第二百七十一條第二百七十二條第二百七十三條第二百七十四條ニ記シタル法式ヲ行ヒシ旨ヲ記シ裁判役書記官双方ノ本人其末ニ姓名ヲ手署ス可シ若シ本人之ヲ為スヲ欲セス又ハ能ハサル時ハ其旨ヲ附記ス可シ但シ此法式ニ循ハサル時ハ其調書ノ効ナカ

ル可シ

第二百七十六條 本人ハ證人ノ其證ヲ述フル
 問辭ヲ參フルヲ得ス又直チニ證人ヲ問糺
 ストヲ得ス其問糺ハ必ス掛リ裁判役ニ之ヲ
 為ストヲ願フ可シ若シ本人此規則ニ背ク時
 ハ十^レフランクノ罰金ヲ拂ヒ再犯ノ時ハ更ニ
 多キ罰金ヲ拂ヒ又ハ其訴訟ヲ止ム可キノ言
 渡ヲ受ク可シ但シ其言渡ハ掛リ裁判役之ヲ
 為ス可シ○其言渡ハ控訴ヲ為シ又ハ故障ヲ
 述フルニ管セス之ヲ執行ス可シ

第二百七十七條 證人費用ノ償ヲ要ムル時ハ

掛リ裁判役證人呼出狀ノ副本ニ其旨ヲ附記
 シ其書ヲ以テ本人ヨリ其償ヲ得可キノ證ト
 為ス可シ但シ裁判役ハ調書ニモ亦其費用償
 ノトヲ附記ス可シ

第二百七十八條 證人吟味ノ言渡ニ別段ノ期

限ヲ定メタルトナキ時ハ双方共ニ最初證人
 ヲ吟味シタル時ヨリ八日內ニ其吟味ヲ終成
 ス可シ但シ其期限ノ後ニ證人ノ述フル所ハ
 其効ナシトス

第二百七十九條 然レ一有本人ヨリ證人吟味ノ期日ヲ延ス可キトヲ願フ時ハ裁判所ヨリ其願ヲ許ストヲ得可シ

第二百八十條 一方ノ本人證人吟味ノ期日ヲ延サントスル願ハ之ヲ掛リ裁判役ノ調書ニ記シ掛リ裁判役其調書ニ記シタル日ニ裁判所ニ申立ヲ為シタル上裁判所ニテ其願ヲ許ス可キトヲ言渡ス可シ但レ其願ヲ為ス時双方ノ本人又ハ其代書師出席ヲ為シタル時ハ後ニ證人吟味ノ時出席ス可キノ呼出狀又ハ

招書ヲ送ルニ及ハス○證人吟味ノ猶豫ハ一度之ヲ許ス可ク再度許シタルト雖レ其効ナカル可レ

第二百八十一條 一箇ノ事柄ニ付キ證人五人以上ノ吟味ヲ願フタル者ハ克訴訟トナルト雖レ五人以上ノ證人ノ費用ヲ相手方ヨリ償ハシムルトヲ得ス

第二百八十二條 相手方ノ證人既ニ證ヲ述ヘ終リ後ハ其證人ニ付キ故障ヲ述テ可カラズ但シ證書ニ因テ其故障ヲ述テ可キハ證ア

ル時ハ格別ナリトス

第二百八十三條

證人一方ノ者

再從兄弟ニ

至ル迄ノ血屬又ハ姻族ノ親ナル時ハ相手方

ヨリ其故障ヲ述フルヲ得可シ又一方ノ者

ノ配偶者ノ生存スル時又ハ配偶者ノ生

ル子ノ生存スル時ハ其配偶者ノ再從兄弟ニ

至ル迄ノ血屬及ヒ姻屬ノ親ニ付キ其故障ヲ

述フルヲ得可シ但シ其配偶者ノ子ヲ遺留

セスレテ既ニ死去シタル時ハ其宗系ノ血屬

及ヒ姻屬ノ親其兄弟義兄弟姉妹義姉妹ニ付

キ其故障ヲ述フルヲ得可シ

又原告被告ノ一方ノ遺物相續ヲ為ス可キ權

アル者及ヒ生存中ノ贈遺ヲ受クル者證人吟

味ハ言渡ノ後本人ノ費用ニテ本人ト飲食ヲ

為シタル者訴訟ニ管シタル諸事ニ付キ本人

ニ請合書ヲ與ヘタル者本人ノ從者僕婢罪犯

訴訟ノ被告人施體又ハ加辱ノ刑又ハ盜罪ニ

付キ懲治ノ刑ヲ言渡サレタル者ニ付テハ故

障ヲ述フルヲ得可シ

第二百八十四條

故障ヲ受ケタル證人ト雖

其述フル所ノ證ハ之ヲ聽ク可シ

第二百八十五條 滿十五歳ニ至ラズル者ノ述

フル所ノ證ト雖モ之ヲ聽クヲ得可シ但シ

裁判役其證人ノ述フル所ヲ相當ニ斟酌ス可

シ

第二百八十六條 證人吟味ノ期限ノ終リタル

時一方ノ者ヨリ調書ノ副本ヲ相手方ノ代書

師ニ送達シ相手方裁判ノ席ニ出ツ可キヲ

招書ヲ以テ要ム可シ

第二百八十七條 證人ニ付キ故障ヲ述ヘタル

事ハ至急吟味ノ法式ヲ以テ之ヲ裁判ス可シ

第二百八十八條 然レ訴訟ノ本案ヲ裁判シ得

可キ手續トナリタル時ハ證人ニ付キ故障ヲ

述ヘタル事ヲ其本案ト共ニ裁判ス可シ

第二百八十九條 證人ノ證ヲ述フル前ニ其證

人ニ付キ故障ヲ述ヘタル時別ニ其故障ヲ述

フルニ付テノ證書ヲ出サ、ルニ於テハ其事

ニ付キ更ニ證人ヲ以テ證ヲ立ツ可キヲ述

ヘ其證人ヲ指示ス可シ然ラサレハ證人ニ付

キ故障ヲ述フルトテ許サス但シ故障ヲ受ケ

シ證人ニ損失ノ償ヲ拂フ可キ道理アル時ハ之ヲ拂フ可シ

第二百九十條 格別ノ道理アル時ハ裁判所ヨリ證人ニ付キ故障ヲ述フルニ付キ更ニ證人ヲ立テシムルヲ言渡ス可シ又故障ヲ受ケシ證人ハ之ニ反シタル證ヲ立ツル為メ更ニ己レノ證人ヲ出スヲ得可シ此等ノ事ハ證人ノ至急吟味ノ法式ニ循テ之ヲ為ス可シ○證人ニ付キ故障ヲ述フル為メ更ニ出シタル證人ニ付キ故障ヲ述フルニハ必ス證書ヲ出

ス可シ又其故障ヲ受ケシ證人其故障カキ旨ヲ證スル為メ更ニ出シタル證人ニ付キ故障ヲ述フルモ亦之ニ等シトス

第二百九十一條 掛リ裁判役證人ニ付テノ故障申述ヲ允許シタル時ハ其證人ノ述ハタル證ヲ記シタル調書ヲ讀上ルニ及バス

第二百九十二條 掛リ裁判役ノ過失ニ因リ證人吟味ノ取消トナリ又ハ其述フル所ノ取消トナリタル時ハ其裁判役ノ費用ヲ以テ更ニ之ヲ為ス可ク再次ノ證人吟味ノ期日ハ其再

吟味ノ言渡書ノ送達ヲ得タル日ヨリ之ヲ數
ノ可シ但再吟味ノ時ハ本人ヨリ以前ノ證
人ヲ出スヲ得可シ若シ其以前ノ証人ヲ出
スヲ能ハサル時ハ裁判役以前吟味ノ時其證
人ノ迷ヘタル所ニ注意ス可シ

第二百九十三條 代書師又ハ使吏ノ過失ニ因
リ證人吟味ノ取消トナリタル時ハ再ヒ其吟
味ヲ為ス可カラス然レ本人ハ其代書師又ハ
使吏ニ對シ費用ノ償ヲ要メ又其代書師使吏
ノ懈怠明白ナル時ハ損失ノ償ヲ要ムルヲ

得可シ但シ此等ノ事ハ掛リ裁判役ノ判斷ニ
任ス可シ
第二百九十四條 一人又ハ數人ノ證人ノ迷ハ
タル所ヲ取消スト雖モ總テノ證人吟味ヲ取
消ス可カラス

辻 士革 校

佛蘭西訴訟法二終

法律書言

大書

